
カリフォルニア 坂の多い町

阿川弘之自選作品——Ⅲ

新潮社版

阿川弘之自選作品

Ⅲ

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1977.



カリフォルニア・坂 さか の多い町 おおまち	昭和五十二年十一月二十日印刷 昭和五十二年十一月二十五日発行	著者 阿川弘之（あがわひろゆき）	発行者 佐藤 亮 一	発行所 株式会社 新潮社	郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話業務三〇三〇五 編集三〇三〇五 振替東京四一八〇八	印刷所 二光印刷株式会社	製本所 新宿加藤製本	定価二七〇〇円
--	-----------------------------------	------------------	------------	--------------	--	--------------	------------	---------

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

カリフォルニア	7
坂の多い町	185
詐欺の多い町	219
ローマの雨	247
花のねむり	257
友をえらばば	269
変らぬ友	281
亭主素描	295
冷蔵庫	303

クレヨンの絵

順ちやんさと秋ちやんさ

黄ばむ

作品後記

初出と初収録

315

331

343

357

366

阿川弘之自選作品

Ⅲ

カリフォルニア・坂の多い町
他

カリフォルニア

第一章

一

船は四千五百哩の航海を間もなく終らうとしてゐる。

船長は既にブリッジに上つた。前甲板では、水夫たちが港の近づいた事を示すやうに、生き生きと働き始め、ウインチやデリックの動く軽やかな機械音がしてゐる。

天気は快晴で、風はやはらかな北西の微風だ。

あんなに濃く黒かつた北太平洋の海の色は、今朝からパステル・カラーに變つた。不透明な明るい色をしたおだや

かな長濤が、船尾の方角から規則正しく本船を追つてゐるが、船はもう揺れる事をやめて、深い船脚を静かにサンフランシスコに向けてゐる。

マストに赤白の国旗が掲げられたのは、水先案内人が移乗を終つたしるしである。此の、合衆国の最初の触手、正味十日と十五時間目に陸の匂ひを運んで来たアメリカ人は、さき程精力的な長身を私たちにちらりと見せて、無線室横の階段を登つて行つた。

小さなモーター・ボートを収揚した大型のヨットが、左舷を遠ざかりつつある。二本マストのヨットにモーター・ボートを積んで触接して来るのが、サンフランシスコ港のバイロットの伝統的な作法で、世界の他の港では見られない事ださうだ。

陸地が見えてゐるやうだが、朝靄につつまれて未だ定かでない。金門橋まで、あと約十哩だ。

今から一時間後に、船は金門橋の下をぐぐり抜ける。初めてアメリカに入国する日本の旅行者たちは、此の時殆ど例外なしに、期待と不安とで少し異常になる、——これは、此の船の事務長から聞かされた話だが、

「夢の国が眼の前にあらはれて来たやうにはしやぎ出す人もありますし、まるで敵前上陸のやうに緊張してしまふ人もあるし……」

先手を打つてからかふやうな事を言はれたので、私はなるべくさりげない様子を装はうと決めてゐたが、やはり今朝方から、鏡の中の眼の色にも、朝食のトーストに対する食欲にも、焦躁感^{ジヤウソウカン}は隠す事が出来ないやうだ。

金門橋を過ぎてサンフランシスコ湾に入ると、船は一旦檢疫錨地に錨を入れる。それから、乗つて来た檢疫官の許可が下りるのを待つて、錨地を去り、岸壁に横附けになつて、其所で合衆国移民官による入国手続と税関の旅具検査とが始る筈だ。

M汽船の此の伊吹山丸は、九千八百噸の新しいニューヨーク定航船だが、貨物船である為、船客は二つの清潔なステイト・ルームに私とも四人しか乗つてゐない。右舷の船室を二人の女性が占め、私たち二人の男性が左舷の部屋を占めて、曆の上で足かけ十二日間の航海を共にして来た。乗組員たちは礼儀正しく、あまりひどい時化^{シヅメ}にも遭遇せず、先づ先づ無事で愉快な船旅であつた。

私たちは、四人とも日本人だ、と言つて差支へないのだらうが、二人が日本人であとの二人はアメリカ人だと言ふ方が、もつと正確であるかも知れない。

ともあれ、あと一時間と少々で伊吹山丸はエンヂンを停止し、旅は終り、私たちは別れる。しかし、物語はこれから始るので、航海と一緒にした此の人々には、今後此の手

記の中で、何かの役割を引き受けて貰ふ事になるかも知らない。カリフォルニアの陸地と、サンフランシスコを象徴する赤い橋とが見えて来るまでの間に、一と通りの紹介をしておいた方がいいだらう。

二

アメリカ合衆国移民官の質問要領に似せて、西洋流に女性から始める事にすれば、最初が、

野島光枝夫人。二十一歳。戦争花嫁。

入国目的、夫と合する為。

行先、カリフォルニア州フォート・オード。

彼女は妊娠してゐる。お腹の子の父親は、今ごろ多分、サンフランシスコの波止場まで此の船を迎へに出てゐる筈の、合衆国陸軍のブラウン一等兵である。二人は埼玉県の某地で十ヶ月前に識り合つた。

航海中私たちは、彼女を「野島さん」と呼んでゐたが、ほんたうは「ブラウンさん」又は「ブラウンさんの奥さん」と呼ぶべきであつたらう。近い将来、彼女が正式に合衆国市民になる事は確実なのだ。

此のアメリカ市民候補者はしかし、英語をまともに話せないやうだつた。彼女が英語を口にするのを聞くと、私の

耳にも、それが明らかな基地言葉である事が分つて、高校の英語教科書の英語とは、大分ちがつてゐた。但し、どちらの言葉が用を弁ずるのにより役に立つかは、別問題である。

彼女は、まめで気さくで、其の上恐らくは少し浮気っぽい性で、随時、私や若い乗組員の船室をノックして、「よこれ物があつたら、出さない。ランドリー・サービスやつたげるわよ。どうせ序でだから」と、シャツや下着を山ほど、腕まくりして持つて行き、いつも船内の電気洗濯機を使つて、洗濯とアイロンかけの奉仕をしてくれたが、其のお礼心にしても、大層美人といふわけには行かない。

しかし、若さで筋肉のよくひきしまつた浅黒い小肥りの身体は、或る種の男好きのするタイプだとは言へるだらう。顔は、殊に化粧を落した時、健康な田舎娘の面影がある。顎の横に小さな肉色の疣いぼがあつて、或る時にはそれが下品な印象を与えるが、向き合つて話してゐて、男が其の疣をいぢつてみたい誘惑を感じても、それは仕方がない。

彼女の方ではさほどにも思つてゐないのに、夫君のビル・ブラウン一等兵が、ひたすら彼女の到着を待ち焦れてゐるやうな口振りで彼女が自慢話するのは、まんざら嘘ではなささうであつた。

ブラウン一等兵は、彼女より一つだけ歳上の二十二歳、モントレー半島のフォート・オードの兵営にゐるのだが、間もなく除隊になるさうで、軍籍を離れたら、郷里の加州フレズノ市で自動車屋を始める手筈になつてゐる。だが、自動車屋といふのは、タクシー業なのか、自動車販売業なのか、それとも自動車修理業なのか、其所のところは光枝夫人にもはつきりしてゐないやうであつた。

「G・Iと結婚した人でもね、黒ちゃんと一緒にやつたのは、ほんとに可哀さうよ」と時折り彼女が言つてゐたのは、ビル・ブラウンが白人である事を私たちに認識させておく為らしかつたが、彼女の口裏を信用すれば、夫君のブラウン青年は「いい家の出の」至極気の弱いお坊ちゃんであるらしい。さきに日本を引揚げる時、彼女に立川発の軍用機に便乗して出来るだけ早く追つて来るやうにと、頻りに頼んでゐたらしいが、彼女は、

「大きな汽船で、沢庵と納豆食べて、気楽にゆつくり行く」と言つて、頑固に日本の貨物船を選んだのださうである。察するに、夫から水増しの船賃をドルで送金させて、余分を埼玉県の田舎の弟妹に置土産にして来たらしい節があつた。彼女は長女で、妹が三人、弟が四人ゐる。

伊吹山丸の甲板で、彼女は毎朝、サンダルを穿いて、緑色のビニールの綱で縄跳びをしてゐた。桃色のマニキュア

を塗つた四角く平べつたい足指の爪が、全部まる見えで、マニキュアはいつも剥げちよろけてゐた。

彼女の縄跳びは、出来れば流産を促す為であるらしかつた。

アメリカへ入国すれば、人工流産は法の禁ずるところとなるし、夫のビルは子供を楽しみにしてゐて日本で始末をつける事を許さなかつたし、アメリカへ行つたら、未だ、おむつの世話よりも少し面白い事してみたい彼女は、出発の前、半日ブランコに乗つて尻の皮をすりむいた事があるさうであつた。

お腹の子はしかし、タフな赤ん坊らしく、ブランコも縄跳びも効果がないらしくて、それに彼女は悪阻と船酔ひとあまり感じないらしく、運動が足りてゐるので、船の食堂で旺盛な食欲を発揮した。スチーム炊きの、船の炊事場の匂ひのする米飯を、味噌汁碗の中へ打ちあけて、丈夫な歯で沢庵を音を立てて噛みながら、両肘張つて何杯もよくかきこんだ。その食ひ振りは、もしかすると暫く前まで米の飯が、彼女にとつて貴重品であつたのではないかといふ想像をさせるところがあつた。

私たちの食事の場所は、船長、機関長以下数名の高級船員と、私たち四人の船客だけが集る所謂一等サロンである。貨物船の事で、一等も三等もないのだが、ともかく、藍色

のカーテン、黄な椅子、デコラ張りのテーブルと白いテーブル・クロス、多少の上品さうな空気が支配してゐる部屋で、百花鳥獣の描かれた壁には時計がはめこんであつて、其の下に、立派なRCAのハイ・ファイとラヂオのコンビネーション・セットが置いてある。夕食には、不味い癖に勿体ぶつた洋食のフル・コースが出る事も、度々あつた。光枝夫人は、此所で食事の時に、スープをひどい音を立ててすすつたり、バター・ナイフを厚く塗つた脣の中へ「氣楽に」突つこんだり、夜おそくまで、同じ島倉千代子のレコードを五遍も六遍もハイ・ファイの蓄音器にかけたりして、或る人々の顰蹙を買つてゐた。一等航海士を初めてする数人の士官たちは、アメリカ合衆国の一億五千万九百万の人口に、又ぞろ、一乃至一・五の国家的な名誉分子が加はりに行く事に、憂鬱を感じてゐるやうであつた。

私はしかし、戦後に学生生活を送つて、国家的な名誉に對して不感症になつてゐるせゐか、野島光枝がミセス・ブラウンになつて、アメリカの人口を殖やしに行く事に、一日本人として格別どんな意識も持たない。沢庵と納豆の好きな彼女が、在留同胞の社会とは別のアメリカ社会に、これからどう適応して行くか、其の適応の仕方の方がむしろ私の興味をそるやうだ。

航海中、彼女は結構、私のいい話相手であつた。私は縄

跳びのつき合ひをして、船医から苦い顔をされたりした。

「客船のドクターですと、お産の経験のある人もあるし、ナースも乗つてゐるけど、私は産婦人科はカンニングで卒業したんだから、勝手な事をしても知りませんよ」と彼は言つた。光枝夫人はそのあと、舌を出して、私に握手を求めた。彼女の手はあぶら手で、とても湿つてゐた。

三

もう一人の女性船客は、

小川京子。二十三歳。

入国目的、留学。

行先、ロサンゼルス郊外、セント・ステファン・カレッジ。

東京の音楽学校を中途退学して、留学生試験に合格し、アメリカへ三年間滞在の予定で行く。

横浜出港のをり、一番たくさんテープをひいて、一番たくさん泣いたのは、此のお嬢さんであつた。静岡の金持の娘で、父親は公務員。横浜の棧橋に、見送人の名刺受が出来た。五十六歳のお父さんは、出港前のあわただしい船内を、随員を随へて、船長の部屋、事務長の部屋、私どもの部屋と、一つ一つ、

「不束な娘ですが、何分よろしくお願ひ致します」と言つて、名刺を配つて歩いてゐた。

「パパ、何言つてゐるのよ。よしなさいよ。みつともないわよ」と言ひながら、京子は泣いてゐた。

アメリカに対して、素直な新鮮な、最も大きな青い夢をいだいてゐるらしいのは、此の人である。

音楽学校では、声楽科に籍を置いてゐたさうだが、寄宿舎の女友達たちの、意地の悪いねたみの多い陰湿な空気に愛想をつかして、「もつとカラリとした国へ行つて勉強したくなつた」のが、留学の主な動機だといふ事であつた。

「あなたのピアノシモ、ほんとに素敵ねつて、皆で言ふのよ。わたし本氣にして、さうかしら、嬉しいわ、有難うなんて言つちやふぢやない。さうしたら、蔭で京子の事、田舎の出だけあつて頼馬だつて笑つてゐるんです。ピアノシモが素敵だつていふのは、フォルテがなつてないといふことなんです。かういふ意地悪つて、男の人には分らないんぢやないかしら？ わたし、日本がいやになつたのよ」と、京子は言つた。

肌の美しい色の白い娘で、二の腕に、濃いうぶ毛が生えてゐる。私は、観音崎の燈台が見えなくなつて、彼女が力落ちたやうにぼんやりしてしまつたところ、初めて気がついたのだが、此のお嬢さんは、独りでものを想つてゐるや

うな時、よく、八重歯ののぞく、濡れて透明な色をした薄い唇を半分ひらいてゐる。それが、唇で求められてゐるやうな感じを男に起させて、たいへん官能的だ。健康で若くて、其の健康さを発散する場所を失つてゐる乗組員たちの中にも、刺戟を受ける人が少くなかつただらう。二十五歳の三等航海士は、デッキに京子の姿を認めると、顔を赤らめて、いつもすぐ自分の船室へ姿を消してしまつた。

春の北太平洋の月明の晩、ライフ・ボートの白いペンキの色が月光に泛んでゐる甲板で、彼女が海に向つて、「アイーダ」を歌つてゐるのが聞えて来たりすると、誰もが、悩ましい旅の想ひにかられるのであつたが、何分素人ではないから、フォルテが充分でないとやつても彼女の声量は相当なもので、屢々所在がはつきりしすぎる。彼女に抜けがけの囁きの出来た人は、誰もゐなかつたらしい。彼女をめぐる男女関係は、航海中結局太平無事で終つた。

京子は、同室のブラウン夫人とは、あまりそりが合はないやうであつた。

「あの戦争花嫁さん、お部屋の洗面場でね、……いやだわ、下着洗ふのよ」と、私に言つた。野島光枝に度々洗濯物を託してゐた私は、ぎくりとして、返事に窮した事がある。

光枝夫人の方にとつても、此の、苦勞知らずのお嬢さん留学生は、あんまり面白くない存在であるらしかつた。京

子が一等航海士と、朝のサロンで、或る種の渡米日本人のエチケットの不足量について論議をしてゐたのが、光枝の耳に入つて、

「あんた、ずいぶん上品ね」と、京子は食つて掛られた事があるらしい。「だけど、あたし、もうすぐアメリカ人になつてしまふんだから、いいぢやないの。我慢しなよ」

其の晩光枝が、「おやすみなさい」と言つたら、京子は、返事をせずに、さつとカーテンをひいてしまつたさうだ。

此のやりとりを、私は、縄跳びのお相手をしてゐて、光枝から面白づくに身ぶり手ぶり入りで聞かされた。

光枝は、私を味方にしておきたかつたに違ひない。私も、どちらかと言へば、京子のやうな女性には、光枝夫人と一緒になつて多少のややもやを感じなくはないのだが、もう一つ別のややもやは、どちらから感じるかと言へば、それは三等航海士と一緒にならざるを得なかつた。緑色のカーテンを閉ちて寢床の上でふくれてゐる京子の姿を、私は想像した。私は京子の夢を見た。

船の中の、かういふ閉ざされた社会では、誰も格別、本気で愛してゐるわけでも愛されてゐるわけでもないのに、三角関係が生じる事があるらしい。ペンキ塗りの鋼板の上に生じる擬似三角関係。陸地が近くなつたら、自然に解消する。船員たちは、さういふ点をよく心得てゐるやうだが、

カリフォルニアの土を踏むまで、暫くの間、事柄を不必要に混乱させないでおく為には、われわれにも多少の心理的技巧がお互ひ必要だらうと、私は思つてゐた。

にもかかはらず、私は京子から、少しづつうとまれ始めてゐるらしかつた。もしかしたら、憎まれ始めてゐたかも知れない。光枝に度々洗濯物を出すのと、縄跳びの馬鹿騒ぎとが、よくない事の最たるものであるらしかつた。其の上、光枝の方からは、

「あんた、あんな娘つ子が好きなの。丁度似合ひかね」などと、時々嫌味を言はれた。

四

其の次は私と同室の男性で、町田良太郎。四十歳。二世。

アメリカ流に呼べば、フランク・R・マチダ、アメリカに妻子のある此の人の場合は、入国ではなくて帰国である。帰国先、カリフォルニア州、サウス・サン・アントニオ。職業は百姓で、サウス・サン・アントニオといふ地名は、伊吹山丸備へつけのアメリカ合衆国の地図には出てゐない。中部カリフォルニアの、どこか、よほど僻村であるらしかつた。

五尺八寸、二十貫は優に越えてゐるだらうと思はれる堂々たる体軀の持主で、頬から顎へかけて七面鳥のやうな肉がだぶついてゐる。アメリカでは百姓でもこんなに栄養が足りてゐるといふ見本のやうな男である。

日本語は一応不自由なく話すが、日本へは生れて初めての旅だといふ事であつた。戦争中イタリヤ戦線に出てゐたし、戦後進駐軍の兵士としても、日本を訪れる機会は持たなかつたのだ。

同室になつて、私はすぐ、

「日本は如何でした？」といふ月並みな質問をした。

「桜が咲いてゐた」と町田良太郎は答へた。「綺麗だつた。つめたい、澄み切つた雪どけ水の流れる小川があつた。私の父が生れた村だ。美しい川だつた。私は毎日、其の川で鮒を釣つて暮らした。村の人たちは、大体において私に親切であつた。私は、村の青年二人を、近い将来、私の所へ呼び寄せる約束をして来た。しかし、村を出て、東京のホテルを根城に、北海道から九州まで三週間の旅をして、私は必ずしも幸福ではなかつた」

「戦後、二百六十万アメリカ人が日本を訪れて、其のうち二百万人までが、日本に来てよかつたと思ひ、日本で面白い生活をして、満足してアメリカへ帰つてゐる」と町田良太郎は続けた。「其の二百万人は、日本の言葉が分らない。

こそそした蔭口を聞く耳を持たず、白い皮膚と青い眼と、ドルの入った財布とを持つてゐれば、彼らが日本中到處で出あふのは、卑屈に近い尊敬と奉仕、控へ目な態度と寛容の精神、そして神秘的なやさしい微笑だ。少しぐらゐの変な事は、我慢出来るし、好意的に解釈する事も出来る。残念な事に、私は日本語が分り、其の上、あなた達と同じ皮膚の色、眼の色をしてゐた。時々、私は自分が全く日本語が出来ないやうな顔をして過ごしてみたが、卑屈な態度を取つたあと、日本人たちが、裏で、裏だけで、どんなに恥知らずにアメリカ人の悪口を言つてゐるかを聞きつけた。しかも、其の悪態が、これまた必ずしも本心ではなくて、自分らの卑屈さを償ふ一つの身ぶりであるといふ、こ

みいつた事情にも気がついた。私は、彼らのやさしい微笑の蔭にあるあいまいな狡猾さと、嫉みの心と、意外な不寛容とを、嗅ぎ出さないわけには行かなかつた。

電車の中で、私は、二人の紳士が長い間かかつて、一つの空いた席を譲り合つてゐる情景を見た。彼らが互ひに、相手に對する尊敬の念から、自分が席を占める事を中々肯じないでゐる間に、一人の荷物を背負つた老婆が、横から其の席へもぐりこみかけた。すると片方の男が其の老人を突きつけて、無理に、もう一人の男を腰かけさせた。腰かけた男は、金齒を出して笑ひ、二三度お辞儀をして、そ

れから眼をつぶつてしまつた。こんなに互譲の心に満ちた礼儀正しい二人の男が、何故第三者の、年とつた女性にも同じやうに礼儀正しくないのか、私は奇異に思つて、数人の日本人の友人に問ひただしてみたが、そこで私が意外な発見をしたのは、かういふ疑問乃至批判は、青い眼のアメリカ人の口から出る時、新聞記事になる程貴重な参考意見であるにも拘らず、私のやうな日本人の血を受けたアメリカ人が言ふと、分を出過ぎた生意氣な意見として、黙殺されるといふ事實であつた」

「私の心にあつた日本は、父や母の物語に聞かされてゐた、古い美しい日本だ」良太郎は続けた。「清らかな自然と、礼儀正しい人々にあふれた、古い水漬けの日本だつた。其の時代ばなれのした夢が裏切られたのが、私の失望の原因の一つであるかも知れない。しかしそれについては、すぐ理解する事が出来るやうになつたと、自分で思つてゐる。曲りなりにも、私たちの国と四年間近代的な戦争をやり抜いた国が、いつまでも、紙と木と花のお伽話の国で留つてゐるわけはあり得ない。私たちの父母が国を出た頃から、戦争の時期を経てこんにちまで、日本が急速な工業化、近代化を遂げて來てゐるのは、当然の事だ。しかし、其の近代化し工業化した日本とは、埃と騒音にまみれた、極度に安手な西洋のイミテーションだといふ印象を、私は拭ひ去